

第3回 伊丹市 未来デザインワークショップの記録

伊丹市ブランドコンセプト策定プロジェクト
～みんなの声を紡いで描く、伊丹の未来デザイン～



「伊丹のブランドってなんだろう？」
「私たちが誇りに思い、
未来へ手渡したい言葉はなんだろう？」
伊丹市がこれから歩むべき未来の指針、
「ブランドコンセプト」づくり。
全3回にわたるワークショップも、
ついに最終回を迎えました。





うだるような猛暑のなか、
産業振興センターには
高校生から一般公募の市民、
地元企業・団体の皆さん、
そして市職員まで、
総勢51名が一堂に会しました。

(参加者49名+オブザーバー2名)

これまでのワークショップを
凝縮し、伊丹の「本音の価値」を
形にする熱い2時間半の記録を
お届けします。



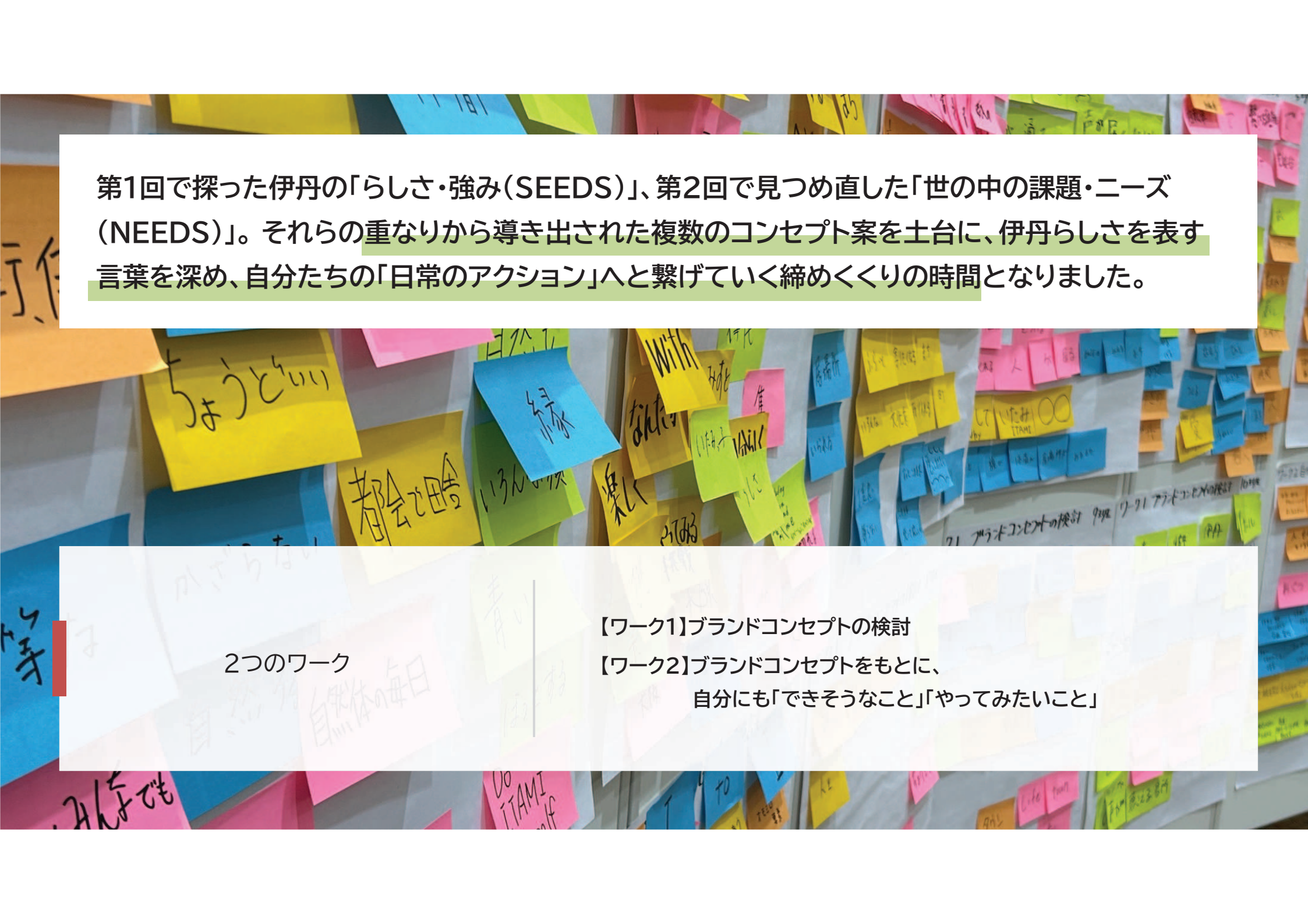
「いいもの」をつくろうとしなくていい。
大切なのは、一人ひとりの「本音」を出し切ること。

「自分にいいアイデアが出せるかな？」
という身構えを解いたのは、市長の中田からの一言でした。

プロの世界でも何千本の中から1本の
コピー(ブランドコンセプト)を生み出す
ように、今日必要なのは完成形ではなく、
みんなが心にふと湧き上がるように
感じる「素材と本音」。

『全員がフラットに発信する』
というルールの下、
世代の違いを超えて、
素直な言葉が
テーブルの上に溢れ出しました。





第1回で探った伊丹の「らしさ・強み(SEEDS)」、第2回で見つめ直した「世の中の課題・ニーズ(NEEDS)」。それらの重なりから導き出された複数のコンセプト案を土台に、伊丹らしさを表す言葉を深め、自分たちの「日常のアクション」へと繋げていく締めくくりの時間となりました。

2つのワーク

【ワーク1】ブランドコンセプトの検討

【ワーク2】ブランドコンセプトをもとに、
自分にも「できそうなこと」「やってみたいこと」

【ワーク1】ブランドコンセプトの検討

ブランドコンセプトとは、一言で言えば、伊丹に住みたくなる理由。

シュツとしすぎたスタイリッシュさではなく、

気取らない「人の体温」や「日常の心地よさ」こそが伊丹の真骨頂であると、

全テーブルで共通の認識が形作られました。



【ワーク1】ブランドコンセプトの検討

●かっこよすぎる英語より、ひらがなや身近な言葉

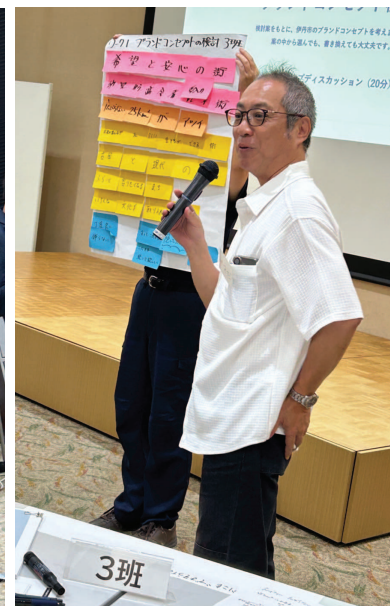
「クロスタウン」などの横文字は伊丹のイメージに合わない。「CITY(シティ)」より「まち・タウン」のひらがな表記や親しみやすさがしっくりくる。

●「隠しておきたい」変わらない魅力

無闇な拡大や成長だけが良いのではない。心地よい「ちょうどよさ」がそのまま続いてほしいという愛おしい想い。

●「声が届く」「風が通る」から「だから、伊丹」

市民の声を行政が吸い上げ、風通しよく想いを実現できるまちだからこそ、ここに住む理由がある。



【ワーク1】ブランドコンセプトの検討

●3つの「つ」と「みんなが家族」

「みんなでつながる・続く・次の伊丹へ」。近所のおじいちゃんやおばあちゃんに見守られる、縁側のような温かい関係性。

●多義的な愛「I to I」と「とかいなか・小皿料理」

自分らしさ(I)、愛(Love)、出会い(相)を繋ぐ。都会的便利さと人情味が小皿料理や宝石箱のように詰まったまち。

●「オールインワン / いい町」と「空が見える街」

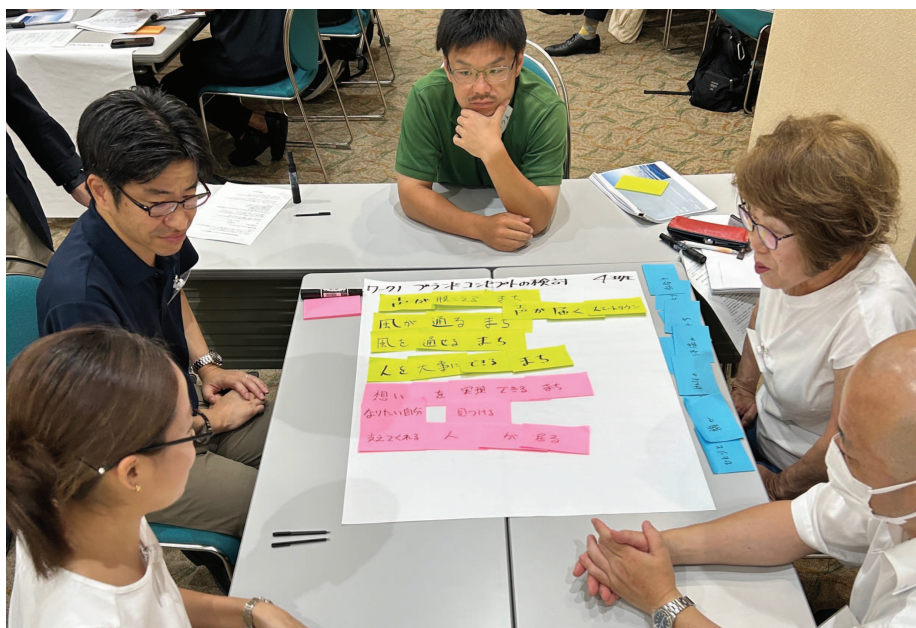
ITAMIを逆から読むと「いい町(I-I-M-A-T-I)」。

平坦で遠くまで見渡せ、頭上に空と飛行機が広がる開放感。



【ワーク2】ブランドコンセプトをもとに、自分にも「できそうなこと」「やってみたいこと」

コンセプトを単なるお題目で終わらせず、
一人ひとりが「明日から何をするか」という
行動にまで落とし込むことで、
ブランドの種は確実にまちに根づくはず。



●日常の振る舞い(あいさつ・笑顔・おもてなし)

「自分から笑顔であいさつする」「相手を家族だと思って温かく接する」「公務や日々の生活で親しみやすさを持つ」

●交流・つながり・居場所づくり

「話せる場やコミュニティに参加する」

「おひとり様や多様な人が集まれる縁側のような場所をつくる」

●イベントや地域行事への参加・お手伝い

「お祭りや地域の行事に客として・手伝いとして顔を出す」

「まちなかのお店で食べてまちを応援する」

●次世代・子どもへの継承

「子どもと地域を繋ぐ」「思いやりのある子を育てる」

●伊丹を知り、もっと好きになる

「伊丹の歴史や清酒・俳句文化を学び、自分のまちに誇りを持つ」

●情報発信とPR

「まちの小さな良い情報を集めて周りに伝える」

「SNSや口コミで伊丹の魅力を発信する」

3日間で積み上げられた、最高の「美味しさの素材」

「シュツとしすぎると伊丹っぽくない」「ベッドタウンではなく、暮らしが完結するライフタウン・リビングタウン」「顔が見える、声が届く、風が通るまち」

全3回のワークショップを通じて出揃ったのは、外面だけを飾ったキャッチコピーではなく、市民の皆さんの生活実感に裏打ちされた「体温のある言葉」でした。



中田市長コメント

「長時間のワークショップお疲れ様でした。全3回すべて参加して下さった皆様にも、今日初めて参加して下さった皆様にも行政としてありがとうございます。本当に感謝申し上げます。

第1回、第2回で伊丹を料理店に例えて、『伊丹の得意料理は何か?』というお話をしましたが、今日は素晴らしい『素材出し』ができた 一日でした。

美味しい人参、美味しい玉ねぎ、質の良いお米がしっかり集まりました。

これがカレーになるか、ちゃんぽんになるか、フレンチのフルコースになるかはこれから精査して、「これだ!」というコンセプトを作ります。

その結果を見て、多くの方が「ん?」「これ?」と思うかもしれませんが、今回の食材を基に作られたコンセプトであると、ポジティブに捉えられるように考えてもらえたら嬉しいなと思っています。

市民の皆さんが伊丹に住んで良かったな、違う町から来た人が伊丹に住みたいなと思ってもらえるように頑張りたいと思いますので、是非楽しみに待っていてもらえればと思います。」

